

異文化コミュニケーション能力を育成する 大学における国際理解学習の教材開発

—遠隔会議による国際討論を活用して—

永田 成文* ・ 早瀬 光秋**

I. 地理科と英語科の連携による国際理解学習

2006(平成18)年度より、後期「地理歴史科教育法(地理)」(永田担当)と「英作文Ⅳ(共通教育開放科目としては「英語Ⅲ英作文」)」(早瀬担当)が連携して、遠隔会議による国際討論を活用した国際理解学習の開発を行っている¹⁾。大学における地理科と英語科の連携は、永田が高校地理教育において、遠隔会議による国際的な意見交流を活用した地球的課題の指導をしてきたこと²⁾、早瀬が大学の英語教育におけるコミュニケーション能力の育成を意図して、三重大学とミシガン大学とテレビ電話(Skype)やTV会議システム(Polycom)による遠隔会議の実績があったこと³⁾で実現した。

国際化が急速に進展する現代社会の中で人類が平和に共存していくためには、世界各国の人々の継承している文化や現代世界の諸課題に対する考え方などの相互理解が必要である。地理教育と英語教育は国際理解学習という共通領域が存在する。地理教育における国際理解学習では、世界の諸地域の生活文化や現代世界の諸課題を考察することにより、認識や思考を深めること、英語教育による国際理解学習では、世界の諸地域の生活文化や現代世界の諸課題を読み物の素材とすることにより言語コミュニケーション能力を高めることが主眼とされてきた。地理と英語教育が連携すれば、自らの思いを他者の心に届ける単なるコミュニケーションばかりでなく、自己と異質な他者との間を繋ぐ相互作用である異文化コミュニケーション⁴⁾能力の育成が可能となる。具体的な連携方策として、世界の諸地域の文化や諸課題に関わるテーマについて、地理科と英語科の学生が協力して諸外国の学生と意見交換をすることが考えられる。

本研究では、大学の教員養成教育において、地理教育と英語教育が連携し、世界の諸地域の文化や諸課題について遠隔会議による国際討論を行うことにより、異文化コミュニケーション能力を育成する国際理解学習の教材開発の手だてを提示することを目的とする。

* 三重大学教育学部社会科教育講座(I・II・III・IV担当)

** 三重大学教育学部英語教育講座(III担当)

本稿では、平成20～22年度に教材として開発した地理科と英語科の連携による遠隔会議を活用した国際理解学習の実験授業について、学生の態度や変容に着目して分析し、より異文化コミュニケーション能力を育成する国際理解学習を考察していく。

II. 2008(平成20)年度の国際理解学習の教材開発

1. 遠隔会議までの概要

2008(平成20)年度は、世界の人口問題に関わる移民の受け入れをテーマとした国際理解学習の教材開発を行った。

地理歴史科教育法(教育・人文学部生17名受講：以降地理科の学生と表記)では、11月26日(水)に、オーストラリアの多文化主義を題材とした高等学校地理の地誌的にとらえる指導案と資料から、移民に関わる社会問題を取り上げた。12月3日(水)に、世界の人口を系統地理的にとらえる指導案と資料から、世界の人口の法則性や人口を分析する視点を取り上げた。

12月10日(水)に、地理科の学生を討論チームと授業チームに分けた⁵⁾。討論チームは、論題：「日本は、人口減少社会の弊害をくいとめるため、諸外国からの移民を受け入れるべきである」について肯定側と否定側に分けた。この後、地理における主題学習として先進国と発展途上国の人口問題を取り上げた。

12月17日(水)に、シドニー大学のSonia Mycak先生からオーストラリアのMulticulturalismについての遠隔授業を受けた。討論チームの冬休みの課題として、論題の賛成側と反対側の立論を証明する客観的な資料の収集を課した。1月7日(水)に、討論チームは授業チームにディベートを披露し、質疑を経てさらに立論を改善した。

1月14日(水)、1月21日(水)、1月28日(水)は地理科の学生と「英作文Ⅳ」を受講している学生(以降英語科の学生と表記)が連携して取り組んだ。1月14日(水)は、永田が英語科の学生に人口問題に関連した移民の受け入れの概要説明を行った。早瀬は英語表現についてのミニ講義を行った。討論チームは英語科の学生と協力して、日本語で記している立論と資料の英語

化に取り組んだ。1月21日(水)は、それらの最終修正とともに、早瀬の指導のもとで発音の練習を行った。

2. 遠隔会議による国際討論

2009年1月28日(水)の1・2コマ(8:50-10:20)に、三重大学総合教育棟Ⅱ1Fメディアホール(Polycom設置)にて、遠隔会議を行った。表1は遠隔会議の流れである。ミシガン大学側は、レジデンシャルカレッジ集中日本語講座(佐藤担当)13名の学生が参加した。

表1 2008年度の遠隔会議の流れ

第1部：40分(主に日本語) (1)自己紹介(名前, 学年, 専門)：10分 (2)ミシガン大生による大学生活の発表：15分 (3)発表に対する質疑応答：15分 第2部：40分(主に英語) (4)テーマの重要性と進行の説明：永田：5分 (5)三重大生による人口問題の立論発表：25分 「日本は、人口減少社会の弊害をくいとめるため、 諸外国からの移民を受け入れるべきである」 肯定側の立論 否定側の立論 (6)立論に関する質疑応答：20分
--

第1部では、ミシガン大生が2～3人のグループをつくり、「日本語のクラスの学生の週末について」「日本語のクラスの学生の暇な時について」「日本語のクラスの学生がよく見るテレビについて」「日本語のクラスの学生の好きな音楽について」「旅行について(クラスメートに聞いたこと)」「日本語のクラスの学生の寝る時間について」をテーマとして発表した。大学生活についての日本語による発表であったので、三重大の学生は自然に参加することができた。ミシガン大生は、日本語の不足する部分はボードを活用して説明するなど工夫しており、三重大生は理解しやすかった。

第2部では、討論チームが英語で立論を行った。地理科の討論チームは賛成側と反対側が向かい合わせに座り、自分の立論に関わる資料を教材提示装置でスクリーンに映し、それを Polycom でミシガン大生に伝えた。授業チームと英語科の学生はその周りに座り、討論チームへの支援を行った(写真1)。

肯定チームは、立論1：人口が増加し税収が増える、立論2：外国人との交流を通して国際的な視野を得る、立論3：人口が増加し少子高齢化が解決する、立論4：労働人口を増やし人口構造を変える、立論5：新しい産業が生まれるを主張した。否定チームは、立論1

：外国籍児童への日本語教育に対応できない、立論2：社会保障費が増える、立論3：外国籍児童の受け入れ体制がない、立論4：日本人の雇用機会の減少、立論5：労働力は不足していないを主張した。



写真1 三重大生の立論発表の様子

ミシガン大生から、次のような質問があった。
 “Where do the people immigrating into Japan usually come from?”
 “For immigrants to legally work or live in Japan, do they have to be of Japanese descent?”
 “Why do you think the population of Japan has decreased in recent years; from a lowered birthrate, or because of emigration?”

討論チームはディベートの立論として発表した資料については、日本語であれば返答できた。しかし、英語による応答が難しかった。そこで、英語科の学生が英訳してミシガン大生に伝えた。しかし、地理科と英語科の学生の連携がスムーズに進まなかった。また、ミシガン大生の質問自体に地理科の学生の想定外のもの(どうやったら市民権がとれるのかなど)があり、返答に窮する場面が多かった。

3. 国際理解学習の考察

地理科の学生に遠隔会議についての感想と改善点を書かせた。次のようなものがあった。

- 異文化理解やコミュニケーションは重要である。
- 日本人とは異なる習慣や価値観を所有していた。
- 英文にできなくても意見は述べるようにしたい。
- アメリカは移民大国だということを実感した。
- ディベート形式ではなくプレゼン形式にする。
- 英語力のアップとよりわかりやすい図表を活用する。

移民の受け入れについて、ミシガン大生は異なる価値観を所有していること、移民の受け入れは日本にとっては論争問題であるが、アメリカにとってはあたり

まえて論争問題ではないことを認識できた。また、発音や抑揚ばかりでなく、さまざまな手法を駆使した異文化コミュニケーションの必要性を実感している。

遠隔会議後、地理科と英語科の学生に、アンケートをとった。遠隔会議で、地球的課題のテーマを話し合えば、認識が深まるか、思考力が高まるか、異文化コミュニケーション能力が高まるかの項目では、肯定的な評価をしていた。三重大生は認識、思考、異文化コミュニケーションの力がついたと実感している。

Ⅲ. 2009(平成 21)年度の国際理解学習の教材開発

1. 概要

2010年1月27日(水)の1・2コマ(8:50-10:20)に、三重大学教育学部遠隔授業教室にて、遠隔会議のを行った⁶⁾。三重大学側は、「英作文Ⅳ」受講者3名、ミシガン大学側は、レジデンシャルカレッジ集中日本語講座学生11名(佐藤担当)が参加した⁷⁾。

遠隔会議までに、授業担当者がメールで双方の学生名及び発表テーマについて交換し合い、それぞれの学生に知らせた。また、遠隔会議の構成・時間配分もメールで打ち合わせをした。

遠隔会議では、まず、双方の授業担当者及びミシガン大学の技術担当者の簡単な自己紹介を行った。学生の発言時間を最大限にするため、学生は氏名、学年、専攻名のみでの自己紹介をした。その後、前半40分は英語で三重大生が発表・質疑応答、後半40分は日本語でミシガン大生が発表・質疑応答を行った。

遠隔授業教室に常置されている Polycom を使い、三重大学からの一度の呼び出しでトラブルもなく接続が完了し、中断されることなく、鮮明な画像、クリアな音声で遠隔会議を行うことができた。

また、ミシガン大生の終始親しみの持てる雰囲気是三重大生の参加者の緊張をほぐし、双方の発表と質疑応答をスムーズに進めることができた。

2. 英語によるセッション(前半40分)

三重大生の3名は、この時までには、日米文化に関するテーマを選び、英作文を完成させる目的で授業を受けてきた。テーマである main topic を4つの subtopic に分け、今回は4番目の subtopic について発表し、質疑応答を行った。3人の学生の main topic と subtopic のリストは次の通りである。

TK(男)

Main topic: Children's games in Japan and the U.S.

Subtopic: Important elements which constitute children's games

YU(女)

Main topic: Our habits in daily life in Japan and the U.S.

Subtopic: The differences in dishes between Japan and the U.S.

AA(女)

Main topic: Calligraphy in Japan and the U.S.

Subtopic: Japanese calligraphy and English calligraphy

原稿読みをしっかりと準備し、個人マイクを使用したこともあり、相手側にきちんと発言内容が伝わったようである。書道の発表では大小様々な筆を示したり、日本食の発表では海苔を食べるのを実演したりして実物の利用が効果的であった。また、3人とも多くの写真や絵を持参し、説明内容が具体的にわかるよう努力していた。質疑応答も活発に行われ、次のような興味深いやりとりもあった。

ミシガン大生から三重大生(AA)への質問

：“Why is only black ink used in Japanese calligraphy?”

AAの答え(しばらく考えた後)

：“I don't know. I will investigate into it.”

予期しない、あまりにも“あたりまえ”なことについての質問だったので、答えに窮したようである。「自分の文化は自分の背中の中のようなものである。なぜなら、そこにあるのだが自分では見えないから。」と言われるが、まさに異文化コミュニケーションを通して、そのことを学んだ例であると思われる。少なくとも中国伝来依頼のしきたりであることは、落ち着いて考えれば一つの答えとして出てくるのだが、遠隔会議という場ではとっさに思いつかなかったようである。

三重大生(TK)からミシガン大生への質問

：“Some people say that competition in children's games is good because it may make children enthusiastic, but other people say that competition is bad because it may make children feel disgusted and offensive. What do you think about competition in children's games?”

ミシガン大生の答え(しばらく、それぞれの学生が同時にしかも自然なかたちで自分を意見などを言い合っていたので、先方の技術者が「だれか一人が意見をまとめて言うように」と伝え、ある学生が次のように答えた。)

：“Children should compete through games in order to learn how to compete in a healthy manner later in life.”

一般的に競争社会と言われるアメリカ文化を反映する回答で、日本との違いを学ぶことができた。なお、それぞれが自由に意見を言った後、誰かがまとめて発

言するという方法は、その後何回か見られた。これは、「意見がある時は自発的に発言する」というアメリカ人学生の口頭発表における典型的な **pattern of behavior** (行動の型) が出たと考えられる。三重大生もミシガン大生と討論する際に身につけて欲しい異文化コミュニケーション能力の1つである。

三重大生(YU)からミシガン大生への質問

: “What kind of Japanese dishes do you like, and why?”

ミシガン大生の答え

: “I like *okonomiyaki* because it has many ingredients and it is delicious. I ate it in Tokyo when I visited there last summer.”

アメリカ人の好きな小麦粉をベースにしていること、油を使用していることも理由と思われるが、お好み焼きは一般的に西洋人に好まれるようである。値段が手ごろなものも学生に受けるのかも知れない。

3. 日本語によるセッション(後半 40 分)

11名のミシガン大生は1人または2人1組になり、「しょうらいしたい仕事について」「好きな食べ物について」「好きなテレビドラマについて」「好きな映画について」「好きな動物について」「デートについて」「クラスメートのしゅみについて」をテーマとしてクラスメートにアンケートを取り、その結果について発表した。

ミシガン大生の発表は、まず、日本語を非常にハキハキとわかりやすく話す(時には読む)ことである。日本語専攻生は1人だけであること、多くが1年生であることを考えると、(日本語は世界の主要言語の中で発音は割に難しくないことを考えても)この印象を強く受けた。ミシガン大学での、日本語教育の効果を実感することができた。また、表にまとめたり、写真や絵を張ったり、質問の順番に表の中を移動するなど、工夫を凝らした発表が多かった。

デート先に「月」との答えを披露するペアもありユーモアを感じた。次のような質疑応答が興味深かった。

三重大生からミシガン大生への質問

: 「おもしろい町で働きたい人がいましたが、どんなところですか。」

ミシガン大生の答え

: 「ニューヨークとかロス・アンジェルスです。ニューヨークはきれいな町です。」

就職のときに「おもしろい町」という発想は日本人にはあまりないと思われるので、このような質問が考

えられる。

ミシガン大生から三重大生への質問

: 「檻の中に、虎と一緒に入れられて、バナナ1本とカバンと靴しかなかったら、あなたは どうしますか。」

三重大生の答え

: 「バナナを半分ずつ虎と食べて仲良くなります。」

好きな動物がテーマの時のことであるが、このような奇想な質問が雰囲気盛りたてると思われる。「和を尊ぶ日本文化」を反映する回答と考えることができる。また、言語訓練としても興味深い質問である。

ミシガン大生から三重大生への質問

: 「どんな趣味を持っていますか。」

三重大生の答え

: 「私は趣味がないんです。何か面白い趣味があったら教えてください。」

このような答えは、言いにくい、和やかな雰囲気であったので、自然に出たかもしれない(写真2)。



写真2 スクリーンの様子(左:ミシガン大,右:三重大)

4. 考察

時間が大変有効に使われた。発表時間を前もって決めたこと、親しみのある雰囲気が遠隔会議開始後から作られ、それが継続したので質疑応答もポーズをあまり作ることなく次々になされたからであろう。また両大学の学生の準備も周到になされていた。双方にとっての発表方法・発言の仕方を含む文化理解、そして生の言語使用訓練に貢献したと思われる。

コミュニケーションのあり方として、三重大生は日本語を話すとき、相手に合わせるように、どちらかといえばゆっくり言っているのが認められたが、ミシガン大生は英語での発言の時はそのようにはあまり見受けられなかった。

また、前述したようミシガン大生は一度に多くの人々が討論することがあったが、いかにも自己主張をモットーとするアメリカ人の特徴かもしれない。討論の中で、他人の意見を聞き自分の意見を確かめているような感じであった。しかしながら、その間、三重大生は、“おいてきぼり”になり内容も理解できない状態であった。アメリカ人の自由な討論を許し、議論を深めてもらうか、発言は原則個別に行うかについては、今後の課題であろう。

三重大生の課題は、英語を話す・読むに関して、相手がわかりやすいように、もっとハキハキと発話すること、特に、語尾をはっきりと発音することを目指すことである。これらは異文化コミュニケーション能力の一部と思われる。

IV. 2010(平成 22)年度の国際理解学習の教材開発

1. 遠隔会議までの概要

2010(平成 22)年度は、世界の文化摩擦といえる捕鯨問題をテーマとした国際理解学習の教材開発を行った。地理歴史科教育法(教育・人文学部生 13 名受講)の 4 回分を活用した。

12 月 22 日(水)に、世界の捕鯨問題の論争点として、鯨を持続可能な水産資源としてとらえるか、保護されるべき野生生物としてとらえるのかという視点から、捕鯨が世界の論争問題となっていることを取り上げた。冬休みの課題として、日本は捕鯨を続けるべきかについて、賛成派と反対派に強制的に分け、関連資料を集めさせた。1 月 12 日(水)から英語科と連携した⁸⁾。2010. 6. 22(火)放送のクローズアップ現代「解決なるか?クジラをめぐる対立!」を視聴し、IWC(国際捕鯨委員会)の迷走を通して、世界の捕鯨論争の理解を深めた。1 月 19 日(水)に、遠隔会議で異文化コミュニケーションの道具として活用するボード作りを行った。表に英語や絵や写真、裏に読みかたなどを記した。

2. 遠隔会議による国際討論

2011 年 1 月 26 日(水)の 1・2 コマ(8:50-10:20)に、ミシガン大学レジデンシャルカレッジ集中日本語講座(佐藤担当)8 名と遠隔会議を行った。表 2 は遠隔会議の流れである。

第 1 部では、ミシガン大生が 1~3 人のグループをつくり、「食べ物について」「音楽について」「夢について」「親友について」をテーマとして発表した。学生生活について、模造紙やボードに表や絵を描き込むなど工夫をしていたので意見交換が深まった。特に、結婚観など日米の意識の違いを理解することができ

た。

第 2 部では、捕鯨を続けていくことについて、賛成派と反対派のチームが英語で意見発表を行った。ミシガン大生の発表方式に習い、2 人組で Polycom に向かってボードを活用して発表した(写真 3)。

表 2 2010 年度の遠隔会議の流れ

第 1 部：40分(主に日本語)	
(1)自己紹介(名前, 学年, 専門)：10分	
(2)ミシガン大生による大学生生活の発表と発表に対する質疑応答：30分	
第 2 部：40分(主に英語)	
(3)三重大生による捕鯨問題の意見発表と質疑応答：30分「日本は、捕鯨を続けるべきである」	
肯定側の意見発表	否定側の意見発表
(4)総合討論：10分	



写真 3 三重大学側の意見発表の様子

賛成派は、アメリカの先住民捕鯨、調査捕鯨の有効性、日本と鯨の関連、鯨食文化について意見発表を行った。反対派は、世代間の意識差、代替製品の誕生、鯨の殺し方について意見発表を行った。

賛成派の“What do you think about whaling in Alaska?”に対して、ミシガン大生同士で議論の末、「アラスカの文化は歴史的な部分なので認めたい。ただ鯨を殺すことは色々な意見がある」と返答があった。反対派で、“Please see the charts(Survey about Whaling). Do you think that not even one whale should be caught?”に対して、「最低限殺すのは仕方がない」という返答であった。逆に「捕鯨は生態系に影響を及ぼさないか」という質問が出され、「ない」と返答していた。

今回は 2 人ペアで、1 人が捕鯨に対する主張を行い、1 人が質問する形式をとった。また、アメリカの立場に関連するものが多かった。質疑のやりとりでは早瀬

が適宜通訳を行った。このことにより、三重大生が伝えたいこと、質問が明確となり意見交流が活発となった。最後の総合討論では、日本ではなぜ捕鯨が問題となるのかなどさらに議論が深まった。

三重大大学の学生は、捕鯨について、重要な語句を赤で書いたり、アラスカの地図を描いたり、年配と若い世代で捕鯨に対する意識が異なる円グラフを提示するなど異文化コミュニケーションを強く意識していた。

3. 国際理解学習の考察

地理科の学生に、日本の捕鯨について、学習前の立場と学習後の立場とその理由を書かせた。学習前は反対が2名、反対が11名であったが、学習後は全員賛成となった。考え方が変化した2名は、「絶滅に瀕していないのであれば、1つの文化として続けてもよい」「鯨を食べたいと思っていなかったが、鯨は尊重されるべき日本の文化だから」と記していた。このように、テーマに対して認識や思考が深まっている。

遠隔会議で感想と影響を受けたことについても書かせた。次のようなものがあつた。

- 日本の鯨文化について少しは理解してもらえた。
- アメリカは反捕鯨という固定観念から脱却できた。
- 地球的視野に立って意見を述べる意義をつかめた。
- エスキモーについて貴重な意見が聞けた。
- 様々な論争問題を深く考える姿勢が必要と感じた。
- 実力行使ではなく対話による解決が必要と感じた。

捕鯨について、ミシガン大生が単に反捕鯨一色ではなく柔軟で多様な考え方をしていることに驚いている。また、遠隔会議による国際討論により、論争問題は対話による解決が必要であることをつかめた。これは、捕鯨問題というお互いに関係するテーマについて、異文化コミュニケーションが成立した証拠である。

V. 研究成果

2008年度は認識重視の立論発表型、2009年度はコミュニケーション重視の意見発表型、2010年度は思考重視の意見交換型の国際理解学習を開発した。それぞれの教材で、国際討論の有効性を示すことができた。

3年間の教材の分析から、より異文化コミュニケーション能力を育成する地理科と英語科が連携した総合的な国際理解学習となるために、お互いの学生が共通して討論できる世界的な論争問題をテーマとして取り上げること、テーマに対し相手国に関連する主張と質問を準備すること、遠隔会議で言語のみに頼らない手だてを工夫することなどがあげられる。

大学の教員養成段階において、地理科と英語科の連

携による総合的な国際理解の教材開発は、今後の教育現場での国際理解学習の普及につながると考える。

【付記】

本稿は、平成20-22年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「大学教育における遠隔会議を活用した連携型の国際理解学習の教材開発」（研究代表者：永田成文）の成果報告の一部である。

【註】

- 1) 「地理歴史科教育法(地理)」と「英作文IV」の連携が行いやすいように、2006年度より両講義は後期水曜1・2コマ(8:50-10:20)に設定している。2006年の実践については次の文献を参照されたい。早瀬光秋・永田成文・荒尾浩子「2006年度アメリカの大学との共同授業を振り返って」三重大学共通教育センター『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』第15号, pp. 11-26, 2007
- 2) 次の文献を参照されたい。平川幸子・永田成文・林原慎「高等学校地理におけるテレビ会議による国際的な意見交流の活用と効果-多様な価値観を踏まえた地球的課題の指導への応用-」日本地理教育学会『新地理』第58巻第1号, pp. 20-32, 2010
- 3) 次の文献を参照されたい。荒尾浩子・早瀬光秋「アメリカの大学との遠隔授業を振り返って」三重大学共通教育センター『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』第14号, pp. 29-44, 2006
- 4) 鳥飼の異文化コミュニケーションの定義である。鳥飼玖美子「小学校英語教育-異文化コミュニケーションの視点から-」大津由紀夫編『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会, p. 187, 2004
- 5) 討論チームは移民の受け入れについてミシガン大生と遠隔会議を行い、授業チームは別枠で小学校で移民の受け入れについて授業を行い、小学校同士の遠隔会議をプロデュースした。
- 6) 2009年2月に三重大学教育学部遠隔授業教室にTV会議システム(Polycom)を設置した。
- 7) 2009年度は永田が長期出張のため、英語科のみで遠隔会議を行った。
- 8) 人数不足のため、「英作文IV」が未開講となり、英語科の有志学生1名と早瀬教員と連携した。